防研セミナー

時代を読み解く

シリーズ①

AUKUSの誕生と課題
―その背景と課題

今月の講師

佐竹（さたけ） 知彦（ともひこ）氏

防研政策研究部

防衛政策研究室 主任研究官

1978（昭和53）年生まれ、東京都出身。慶応大学法学部政治学科卒、同大学法学研究科前期博士課程修了、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（国際関係論博士）。2010年防衛研究所入所。13～14年防衛省防衛政策局国際政策課部員を兼務、15年豪国立大学クロフォード研究所豪日研究センター客員研究員。専門は同盟研究、アジア太平洋の安全保障、豪州の安全保障政策等。共著に「豪州と米中関係―『幸福な時代』の終焉」（森聡・川島真編『アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』東京大学出版会、2020年）など。

今月から新たに、安全保障問題のエキスパートとして活躍する防衛研究所の研究者による連載がスタートします。近現代史から時事問題まで、それぞれの専門分野から鋭く切り込み、その背景などをかみくだいて解説します。毎月、下旬に掲載予定です。どうぞご期待ください。

次期潜水艦めぐる混乱

2022年9月月15日、米豪英の首脳が共同でデ配信を発表し、防衛科学大学（AI）、量子技術に関する協力等を念頭に置いた新たな枠組みを創設し、その最初の案件として、豪州による最初の潜水艦の取得を支援していくことを発表した。実現すれば、豪州は原子力潜水艦を保有する7番目の国となる。

AUKUSは3月国の徹底した情報管理のもと検討が進められたものであり、多くの専門家にとっても「寝耳に水」の発表であった。報道によれば、同構想は、そもそも2021年3月に英国が米国に持ち掛け、最初の「アタック級」潜水艦が就役する2030年代半ばまで、およそ10年ところが、その後、「アンスは一貫して、契約の継続を伝える一方で、英米は、アタック級 の計画は延期し重ね、またその費用も当初の見積もりから倍近くに上る見通しが示されていた。潜水艦計画の遅延の結果、ニコラス大使の召喚など強い対応をとったが、豪州の決定は揺らがなかった。

そもそも広大な海に囲まれた豪州にとって、南シナ海やインド洋において戦略的な意味にアクセスする上で、豪州の次期潜水艦の取得をめぐる混乱が存在した。

2016年4月、豪州は現行のコリンズ級潜水艦を代わる次期潜水艦として、フランスの「ナバル・グループ」社の開発するタック級 と呼ばれるディーゼル潜水艦を選定した。

2022年9月月15日、米豪英の首脳が共同でデ配信を発表し、防衛科学大学（AI）、量子技術に関する協力等を念頭に置いた新たな枠組みを創設し、その最初の案件として、豪州による最初の潜水艦の取得を支援していくことを発表した。実現すれば、豪州は原子力潜水艦を保有する7番目の国となる。

次期潜水艦めぐる混乱

AUKUSは3月国の徹底した情報管理のもと検討が進められたものであり、多くの専門家にとっても「寝耳に水」の発表であった。報道によれば、同構想は、そもそも2021年3月に英国が米国に持ち掛け、最初の「アタック級」潜水艦が就役する2030年代半ばまで、およそ10年ところが、その後、「アンスは一貫して、契約の継続を伝える一方で、英米は、アタック級 の計画は延期し重ね、またその費用も当初の見積もりから倍近くに上る見通しが示されていた。潜水艦計画の遅延の結果、ニコラス大使の召喚など強い対応をとったが、豪州の決定は揺らがなかった。

突然の契約打ち切りにフランス側は激怒し、駐豪フランス大使の召喚など強い対応をとったが、豪州の決定は揺らがなかった。

そもそも広大な海に囲まれた豪州にとって、南シナ海における戦略的な意味にアクセスする上で、豪州の次期潜水艦の取得をめぐる混乱が存在した。

この「潜水艦ギャップ」問題に対処するため、豪政府は「コリンズ級」を改修して、その耐用年数を延長し、2022年に延期が決定する方針を発表した。一方で、フランスは、2022年に以降の新たな潜水艦計画に関する独立した検討を開始した。

その結果、豪政府はフランスとは、契約の継続を伝える一方で、英米は、アタック級 の計画は延期し重ねて